

明治座劇評 二十六年十一月〈摘録〉

饗庭篁村

〈出典：『竹の屋劇評集』東京堂、昭和2年10月〉

(一)

明治座新築落成して舞台開の初興行に縁起を祝う源氏の旗揚、其旗色の素人評者吉例により引幕がわりに大褒詞を此に飾らん、のし水引に作り花白木の台に乗せ、栄のないも数には穿鑿^{いりほが}の理屈も真は最負からゆえ只賑かしと受納たまえ。

(三)

二番目は「遠山桜天保日記」という名題にて近世の名奉行と聞えし遠山左衛門尉が履歴を新たに作りしものなり。これに近頃評判の探偵談、ピストル強盗清水定吉と裁判官に化て居た辻村庫太という盗賊のこゝを作り交えたるものにて作意は徹らず、遠山の人物も現れては居ねど、幕毎目先かわりて面白き狂言なり。序幕花川戸稽古所の場、落咄を目で見るだけの経師屋連の悪可笑味、荒次郎の番頭清六も体量と共に軽くはゆかず、福助の清元師匠^{のぶわか}延若美しく、小団次の小三郎も後に悪になる性質を見せて全で突転ばしでなく、柔^{おとなしい}うち^{おとなしい}に何処かコセついて生意氣らしい所ありて大によし。色男役の若旦那が情死を仕損ねて諸方をさまよい、終にゴロつきになりて知人の家へ強請に来るといふ切られ与三と、鬼坊主清吉の^{ひあわい}庇合^{ひあわい}に生たような至極むずかしい無理な役を、是程に仕分しは此優もなかなか巧者といふべし。猿之助の須崎政五郎理を解いて延若と小三郎の縁を切らせるところよし。三^{みめぐり}圀^{みめぐり}の場権十郎の浄念寺の天学、寺の坊主よりは此処等をウロつく気障通の俳諧師と見えたり。吉原へ通う途中で強盗に逢い、その強盗を捕人の役人に間違えられて縛られるといふ此場の趣向は二番目中第一の作者の働らきと賞すべし。誠や人の災難にかかる不祥の場所に行き合い、乾すことかたき濡衣の袖^{そでくた}腐ちゆく身となること世には往々ある例なり。それも日頃の身持よくば一たびかかる疑の雲も忽ち晴れ行きて、時雨の後の冬の月鏡の面を拭いしごとくいと清になりぬべし。左れど君子は危に近よらず、乱邦には入らず、危邦には臨まず、取分若き人々はナモシ其処其処等の近辺へも近付かぬよう用心せられよ。左団次の浪人生田角太夫もとよりよし。天学を威して金を奪わんとする、此とき早や手先は前後に窺い居て天学が盗賊々々と立る声をしるべに御用とかかるを前後左右に潜り抜け一発放すピストルに驚く手先、堤から落る天学、その間に早くも影をかくす、暗に迷わぬ強盗の働らき、絶妙々々。手先が天学を引立て行くあとを見送り木蔭から悠々として「馬鹿め」の幕切は少し位過て前に勤められた石川五右衛門が忍術で捕人をくらまして花道の引込と気合かわらず、尤も此優河内山を勤めし時も北村大膳を嘲弄しての引込に「馬鹿め」が憎さげにて団十郎の如く軽く出ず、嘲弄とは聞えずして寧ろ遺恨ありし者が仕損じせしを心地よしと見て罵るに近かりしが、今度も下目に睨んでセセラ笑いながら云わるは如何にぞや。或る盗通曰く、盗賊は一般に手先岡引をつねに疾視^{にくみ}居るものなり、ゆえにそれが仕損じあればもっとも快よしとす。此も人違の失策を見て態を見ろと嘲けるとこ

ろなれば、河内山とは違いて此調子が至極道理にかないたりと。成程これはよく云れたり。依て素人評者は前言を取消し此処大出来々と致すべし。楮中幕に扇屋熊谷を挟みこれを芝居の芝居とし、直に御囃子部屋にて喧嘩の事にせしは歌舞伎座の公平以来の働らき、作者の案じ大に人気に協いたり。つらつら思えば世の中の世智辛さよ、芝居で芝居を見せた丈では承知せず、芝居で芝居をして居た芝居を見せるという、二杯がけの盛をよくして漸やく見物満腹の体とは。嗚呼夢で夢を夢みるにも似たるかな。ムニヤムニヤムニヤムニヤ。

(四)

中幕扇屋熊谷の評は終に委しくすべし。此幕しまるとあとシャギリのまま河原崎座囃子部屋の場となり寿美蔵の六郷新三郎、御家人が道楽で囃子方に出て居て巾を利かす所よし。左文次の望月太文次上方訛にネチネチと理屈を云いての争いもよし。此優芸によく心を入れて居る様なれど、何分調子がハキとせぬ為め当り目も見えぬが、こんな役で其調子を役に立て使って見るとなかなかよい所あり。此へ留に出る小団次の留場もよし。「見たきもの楽屋」という其楽屋を其ままに見せるなれば一入面白し。左団次の芳村金四郎実は遠山金四郎、ガエンまでもしたというほどのデンボウにて肌を脱いで文身を見せ、了簡ならざア己が相手だとタンカを切るところ江戸子の気前見えてよし。此人が今の北の町奉行なら特別市制廃止運動会へ飛び込み高田早苗氏のあとにて必らず爽快の演説をなすならん。すべて此場へ出るもの皆よし。併し狂言の趣向も此分で行くと遠からず京伝の夫からいらい記の穿ち通り団十郎家の場、福助住家の場など其まま見せ、竹葉の山の芋の蒲焼を喰て嬉しがる事なるべし。長生見度記に「高輪の海手新地出来て高輪の茶屋両側となる」とあるも未来記通り今はなりぬ。楠むたい記の智恵かな智恵かな其先を潜て考えれば文星沖の御台場どころか拙者の如き彗星は掃く程に跡から押されてチクラが沖に漂うならんか、面白し面白し。三幕目成田山断食堂の場、小団次の祐天我が愚鈍をくやみて身を捨ての断食の行あわれにてよし。荒次郎の伯父甚五兵衛朴訥のうちに甥をあわれむ情あふれてよし。此優此役が一番よけれど気の毒や夢の付合せ、猿の中の通が柱にもたれ前歯で生姜を嚙ば知らず、只では賞翫もされぬなるべし。居所がわりの大仕掛忽ち成田山の本堂となり、火焰烈々たる中に現われ玉う不動の尊容、実に尊くもまた恐しく思わず頭を下げて信を起しぬ。団十郎が身体に満る技芸の勇氣は即身即不動、此に至っては誰人か団洲信仰者とならざらんや。「只余念なく呪文を唱え我傍近く来れや祐天」の其声今も耳に残れり。護摩木山の場物凄き杉林の中に小団次の小三郎今は祐天小僧と異名を呼ばるる博徒となり、此に野宿して前の祐天のことを夢に見て居るを、左文次の山番に起されて夫なら今のは夢であったかのお定まり、イナセでよかったが、これも考えて見れば成田の護摩木山で祐天が鈍血を吐いて大智識となる。不動の利益を夢に見るからは、此が為め改心し今までの所業を悔んで親に孝を尽すなどならねばならぬに、祐天が立派な僧になったように己も夢で舌を嚙んで血を出したからは能い悪党になりたいものだと、夢からいよいよ悪心にな

るとは、左りとは不動様を踏付にした考え、又不動様も商買になさるに似合ず、是を只見て夢は銘々の勝手に見るもの、其解釈も各自の自由にまかせますと澄してござる不動様も余り信仰者が多くて喧しく拝み立られるより少しポットなされたと見えたり。兎角大勢に拝み立られ担ぎ廻られると誰でもポット来てセイタカに不都合があってもコンガラかった事情という縛の縄にからまって、暖まりのない火を焚くものなり。此へ左団次の角太夫権十郎の天学、牢拔をして落合い三人兄弟分となるより猿之助の政五郎と並んで世話ダンマリ、大出来々々。

(五)

遠山邸の場、寿三郎の母はさすが老功とて怒のうちに慈愛こもり品格ありて大によし。升若の妻おけいもよし。米蔵の弟清之丞は兄の身の上を案ずると云う気味薄く、何卒廢嫡になって己が跡式をなど願いては居らずやと思わる。左団次の遠山金四郎何の為にグズ酔になって親や女房に苦勞をかけるか一向了簡方分らず。母の意見にキットなりて本心を明かすときは酒気少しもなくなるも不思議。しまいに嘔おくび一つして間を合すなど何う見ても偽生酔なり。今の役人は下情に通ぜぬゆえ其身わざと芝居や吉原などへ入りて、親しく民情を察し置き、万一当路の役人となる時お上の御用に立んとは色々変った心構えなり。親兄弟女房までが疎んずる程の行状、其事が聞えたばかりでも御召出どころか改易が危ないものなり。依田学海翁曰く、御老中に人物ありて予て遠山の用うべきを知り内命して下民の情を探らすと云う事にせば、母や妻にも疎んぜらるる放蕩者となりて其本心を明かさぬもよかるべし。此時御用召の吉報ありとせば首尾合うべしと。此評の如くならでは遠山は只己惚の無頼者なり。此は俳優の罪でないとしても此訳ゆえ大出来の安売もなりかねたり。四幕目花川戸政五郎家の場、猿之助の政五郎大によし。此へ小団次の祐天小僧、前幕の護摩木山で拾った煙草入を種に揺りに来て金を貰って礼を述べて帰る迄よくはして居れど、策へ水を汲む様な狂言の筋ゆえ、褒方が無いに評者も当惑なり。左団次の按摩電庵実生田角太夫これは何も彼も引くるめての上出来。療治をしながら折々家の様子を見るなど仲蔵の宗庵より強みがあり、門付の女が我女房なるにギョットし身を捻向けて煙草の火を探る様子よし。尾花屋の様子を聞くうちも新潟の話をするうちも十分に、さすが此の座頭と感服したり。療治代を忘れて行かけるより花道にかかり大きく目を開いて欠伸をし、急に又閉てトボトボと杖で探つての引込迄息もつけぬほど面白かりし。升若のお元娘を養女にやって始終往復した家へ門付に来るとは異な訳だが、これは作者の都合として仕ぐさは夫に縊り殺さるるまでよし。偕此に分からぬ中の分からぬというは政五郎が尾花屋へ刀を研にやったのが出来て来たというので之を抜放して見る一条なり。此刀定めて何かの用ならんと思うと一向何の関係もなし。殊にぼたんの丁稚がクドクドとした下手な身上話しは退屈なり。或人曰くこれは左団次の為に無理にぼたんに役を付けたの故、只ブラリと此へも出られぬ為刀の研が出来たという事にせしなり。刀の研が出来た事になって見れば政五郎も夫を抜放して行燈の火影に見る位いの事をせねば刀も片付かぬなり。ソコデス

ういう事になったので、まことに抛ない訳なりと。又或通曰く、否然らず、政五郎が刀を抜いて見るので見物は定めし此刀がと跡に気をつける、それをドッコイと引手を喰せて何にも用^(ママ)わぬところが作者の新趣向というものにて、支那の小説に此手はいくらもあり。幕切の雪洞へ打付た手裏剣が後の証拠になるなどの古い格では、何事も実地がる今の劇界にはまるものかと。両説いずれが是なるや知らねど、恐らくは後の説が作者の心を得たるなるべし。此処作者大出来々々々。

(六)

山の宿尾花屋の場、左団次の電庵杖に仕込みし槍の身にて板塀をコジ放すと、其穴からニューと荒次郎の番頭清六が這出るは意表に出て頗る妙なり。此作者目先を換えて面白くする事は故黙阿弥翁の骨法を得たりというべし。電庵は驚いて塀にピツたり付て姿を隠すと清六は少しも心付かず、家を抜けて吉原へ行こうと思うに裏表とも戸締りが固く困って庭へ出ると、犬が板塀を破って丁度出られるようにしてあつたは天の助けと独言ながら、持ち出した金を出して見て之を取落と電庵手早く杖の先へかけて取るはよし。此で祐天小僧と名乗合があり祐天は別れて入る、あと捕手がかかるを例のピストルで跡を晦まさんとするをついに捕えら^(ママ)らまでの隙もなく大出来。寿美蔵の手先もよし。大番屋の調に表へ立ちつどういろいろな人物も実地らしし。此の電庵は按摩道玄と同じような筋なれど、菊五郎とはまた行方の違つたずうずうしさ、左団次だけの甘味あり。此役は近年此優の出来というべし。海老にかかつて苦しみに堪えず白状致しますと縄を緩めさせ、目を開いて出役の人を見れば天学なるに、此奴は牢破りの悪党だと旧悪を饒舌り立て、天学が捕まる騒ぎにまぎれ縄付のままで逃して仕舞うもよし。五幕目北町奉行白洲の場、福助の若紫が綺麗なばかりで跡はホンの跡片付だけ、肝腎の名奉行の捌きサッパリ理に中らず、若紫に金はんと呼ばれ、予は三奉行の一人と迄成たが若紫まだ其方は曲輪を出んかと、昔にクダケていう此狂言の山という所も一向に榮ず芝居も取潰せという説もあつたが予がさえぎってそれを止め近々他へ転座さするつもりだ杯と私恩を売り、味噌を上げ、トントいけない御奉行なり。こんな奉行は遊廓を他へ移す前に用達紳士塵取髯右衛門と謀し合せ其地を買取せて置いて利益を山分にしたり、入札の棒先などを切たがるものなり。今時は斯様な味噌奉行がなくて我々は仕合、新潟行形亭の場芸子の踊面白し。客も其に交つて踊る内に捕物になるは賑やかにてよけれど、近藤重蔵の松島の場と一形なるは味噌濃き心地す。兎も角も見る目に飽の来ぬは作者の手柄というべし。(あと一日で此評終り引続き歌舞伎座新市村座大通評御覧に入れたてまつり候、記事輻湊につき一日休みと来ると助かるなどと無慈悲な事をの玉わず御神妙に四五度ずつ繰返し御読のほど願上候)

評余

立派な大芝居が目出たく幕開となった今日にノソリノソリと劇評も如何なれど、それも狂言これも狂言、人間に目が二あるが因果と諦め能い方の目で大芝居の評を御覧じ、チト怪しい方にて此評もまた読せ玉え。

興深き二番目物〈摘録〉

江澤春霞

〈「演芸画報」大正15年2月号〉

願わぬ事の震災が勿怪の幸。爾来、千駄ヶ谷のお殿さま大成駒を首め多くの千両役者が、入れ替り立替り替り榮えのする出演にめっきり小屋に箔の付いた浅草の松竹座へは、延若左団次もモウ稀しくなくなったのも慶く、此の初春にも右の左団次と其の一座の寿美蔵松蔦左升荒次郎と猿之助芝鶴、竝に、延若市蔵秀調亀蔵権十郎源之助と云う大一座の大陽気で、幹部一同が入替り立替るお目見得は役者の都合の自由に付く松竹ならでは能きない芸当。其の役者の顔を見るだけでも、席料のお価値はたつぷり有ると申すもの、加之もこれ芝居が面白いと来てはテンと堪まったものではない。初春の当座は、同じ月の大劇場各座を引括めて面白さでは最優等。並べ方も可いが狂言の一つ一つがみんな佳い中に、夜の部の『遠山政談 噂白浪』が群を抽いて、こいつ耐まらぬ面白さに、世話物好きの僕、観る双眼から嬉し涙を膝へポタポタ。みっともないが嘘では無い。

此处で少し、材料の出所其他、此の狂言に就ての通を並べたいのであるが、何もこれが大作の古い型物と云うでは無し、今を去る事三十年以前、明治座の立作者竹柴其水が当時の座頭先代左団次へ嵌めて云わば其時の調子で書いた講釈物、立派な狂言作者でさえ、講釈は講談と云うものだと心得、役の江戸っ兒に、芝居をしばいと云わせて平気である世の中では、今更通を並べたところで所詮は無益、多くの読者の御迷惑をお察し申してそれは省き、其水翁の筆にしては巧く書けていると云うに止める。

然し、近頃芝居道の諸事乱脈にして、折角作者が命けた大名題を平気で取替えて澄ました顔でいる人の多いのには、困る。名高い遠山の金さんにはお奉行になつては邪魔な桜の刺青の有るのが愛嬌。それが此の狂言の眼目で、時は天保。大名題も其処から来ているものと知り乍ら、今度は金さん大分省われて、左衛門尉で白洲へ顔を出すだけなので、猿之助が二役の遠山は、眼目のお白洲で腕も捲らず至って神妙。従つて、大名題も、角太夫を中心に仕た『噂白浪』では、遠山桜をウロ覚えの僕等には間違いの因。同じ事なら書卸し通りの大名題に願いたいのだ。尤も、延若が売物に仕かけている遠山桜が別に有るが、ナニ本家は此方だ。其の遠慮なら此後ともに無用に仕なさい。

今度は、前申す通りに金四郎放浪の条をスッカリ省い、角太夫が強悪の条だけを、猿之助が其柄なり演勝手から出したのは、然もある可きで、従つて、芝居は面白くなった。然し、それが為に、稽古所を除いた心中場から直に護摩木山になり、場割の続く為に其間の

連絡不明、義を結ぶ三人の台辞で満ざら分らぬ事も無いが、接ぎ方が些と拙い。其故と云う事もなく、此の護摩木山太甚だ締まらず、景もまた整わなかった。是れ、三優が舞台の巧者のまだ其処までは行かない為で、役者には芸術以外舞台に大切な修養の有る事が能く分る。三優とは、生田角太夫の猿之助、祐天小僧の亀蔵、佐島天学の権十郎とは、観た方は好く御存じ。但、締りのわるいのは、此場の中心になる祐天、小僧々々して、此役に已に締りの無い為でも有った。

猿之助の角太夫は、六代目菊五郎張とも見える悪党振で、菊五郎よりは顔に愛嬌の有るのが、角太夫の按摩電庵の役を面白く仕た。大体、此役は、村井長庵も有り『霜夜鐘』の宗庵も有るが、明治二十六年、折からピストル強盗清水定吉の逮捕に其噂の高いのを当込んだ其水翁同年の書卸しではあて込みの世話狂言の味は、長庵よりも宗庵よりも、清水定吉が最も柄に適まった猿之助に好く出る。

尤も、政五郎内で頭巾を脱ぐと、定吉の率は減って宗庵の方の率は殖えるが、政五郎の療治を為る間の電庵は、菊五郎ならチラリと悪を見せそうな所を、優は少しも見せず、終始愛嬌の有る按摩で通す器用な仕草は、前受も仕たが巧くも有り、久々で猿之助の役らしい役を観た。源之助の政五郎は、顔役でなく、抱えの遊女に優しい御内所の旦那さん。然し、世話物上手の人。この人ならば猿之助も演好かろう。

尾花屋裏では、電庵にがらりと変った悪に出て、太々しい裡に愛嬌の有る、猿之助自身案出らしい手も混って、立廻り滑稽 ■ 出が可笑しくも有り面白くも有り、此処も当った。亀蔵が羽左衛門張の此場の祐天小僧は何となくバサケる。年の若いのに、此人何故トロリと仕なかり。荒次郎の番頭清六は其仁。

幕になって廊下へ出ると、戸外にはパラパラと庇を打つ囊の音。自動車を有たぬ身は帰りを焦かれ、後日の再観を期して早速退却。従って、面白かる可き自身番も、猿之助が二役のお奉行さまも実は知らず、秀調の若紫も、権十郎の天学も、共に見残したが、後で思えば不覚の至り。何でも電庵の根強い悪が見ものの由、返す返すも惜しい事を仕た。

手を支いて恭しく礼を云う程の世話物を観たいとは、常日頃口に為る僕の冗談。些と其処までは行き兼ねるが、此の狂言の面白さを見て、芯から世話物好きの僕、これからは、うっかりこんな冗談を云わぬ事に極める。